地域資料と類縁機関

——全国図書館大会参加記——

水口政次

昨年10月に全国図書館大会(テーマ:豊かな地域社会をめざして——図書館と生涯学習)が東京の多摩で開催された。その分科会の一つは、「開かれた郷土資料(地域資料)のために」というテーマで101名の参加者を得て行われた。この分科会の主催者は、開催地である多摩の公立図書館の郷土資料担当者の研究グループであった。このグループの正式名称は三多摩郷土資料研究会といい、昭和50年に発足して以来13年間にわたって、郷土資料についての情報交換、各館の郷土資料の実情把握、郷土資料についての先達の講演会を柱に活動を続けてきた。研究成果として「三多摩郷土資料団体・資料目録」、「郷土資料分類表」、「多摩地域郷土資料業務実態調査報告書」等を発表している。

分科会では、図書館関係者以外で多摩に設置されている機関のうち博物館学芸員(府中市郷土の森博物館)、法政大学多摩図書館地方資料室担当者、多摩中央信用組合多摩文化資料室担当者、そして私が報告者として参加した。それに加えて日本図書館協会の理事長が特別参加した。

この分科会について印象に残った点を大会記録から拾ってみよう。まず、際立って印象的だったのは、日本図書館協会の理事長が基調報告として次のように語ったことである。「今我々が現在の市民を対象として情報公開のために集めた資料は、100年たてばその地域の伝統的な資料になる。……明治以後の近現代における行政関係の資料、その地域のコミュニティの中で活字になったもの、広く書かれて配布されたものについては漏らさず集めていく。そのようなことで100年後先を見てたのしみながら、厳しい目を持って集めていくことをお願いしたい」この報告を聞くと図書館関係者の話よりむしろ文書館関係者の報告に近いと思った程であった。

次に、その他の報告で印象的だった点を挙げ

てみよう。博物館学芸員は、「一つの地域の中で博物館、図書館、公文書館、大学等をどのように結びつけ、どのようにして、資料の共有化を図るかは今後の課題である」と報告している。また、大学図書館地方資料室担当者は、次のように述べている。「これからは一大学、一図書館、一郷土館という時代ではなく、それぞれの固有の活動をされると同時に交流が必要になる。同時に、競合という問題も出てくるかもしれないが、それぞれの機関が持っている特色を生かしながら協力していくべきであろう。」さらに、信用組合多摩文化資料室の担当者は、私企業の立場でこう述べている。「私企業として行政と利用者との間に立って物を考えていると、行政は物を考え実行する場合の制限が非常に大きく、必要なものを必要に応じてできないという体制がある。これから総合目録をつくるとか、情報検索などで異業種と何とかをまとめていく際には制限が出てくると思うが、必要かどうかを決めるのは利用者である」と行政に対して厳しい指摘を行っている。最後に、三多摩郷土資料研究会を代表して蛭田氏(小平市中央図書館)が報告し、その結論として述べた点は、この分科会にふさわしいものであった。「郷土資料を充実させるには、担当者の日々の積み重ねと継続こそが力であり、収集された資料が人を呼ぶのである。その資料が生涯学習を支え、地域文化の創造につながっていくのではないかと期待している。」

この分科会に参加して感じた点は、分科会の報告者が異口同音に各機関の協力体制の必要性を唱えていたということである。このことを確認できただけでも、分科会の最大の成果ではないかと思う。今後、各機関は地域を基盤として業種の違いを越えて横のつながりが作れるだろう。我々にとって明るい見通しが持てるのではないだろうか。

(東京都公文書館)